あなたの街のドクターがアドバイス

認知症の診断に有用な画像検査について

脳血流SPECTで認知症の鑑別診断ができます

認知症の画像診断としては、脳血管障害の有無や脳萎縮の部位と程度がわかる形態画像検査としてMRIが一般的ですが、機能画像検査として脳血流を調べる「SPECT」も有用です。

SPECTは、ラジオアイソトープで標識した放射性医薬品を使用して、脳の血流を測定する検査ですが、認知症の原因によって脳血流の低下する部分が異なることがわかってきました。SPECTの画像を統計解析する方法には、eZIS（イージス）、Zgraph（ジーグラフ）などがあり、脳の血流の低下しているところが色付けされて表示され、さらに血流低下のパターンを数値やグラフで表示して確認することができるようになりました。この画像解析は、特にアルツハイマー型認知症の早期診断と、アルツハイマー型認知症とレビー小体型認知症などの鑑別診断に有用です。

年齢相応よりも、もの忘れが少し多い状態である「軽度認知障害MCI」は、認知症の前段階であるといわれていますが、このMCIでもSPECT検査で脳血流の低下がわかる場合があります。そしてもの忘れが気になる方でもSPECTでアルツハイマー型認知症に特徴的な所見がない場合には、安心することもできるかもしれません。

さらに最近は、神経伝達機能の画像診断である「イオフルパンSPECT（ダットスキャン）」という検査により、パーキンソン病やレビー小体型認知症の診断精度が向上し、治療方針の決定に寄与しています。認知症の画像診断は進歩していますが、認知症の診断で一番大事なことは、認知機能の低下（もの忘れ）の程度を調べる高次脳機能検査の結果と、いつから症状が始まったかなどの病状の経過の情報ですので、あくまで画像診断は補助診断として有用であるということを忘れないでください。

今回のドクターは

医療法人明日佳
札幌宮の沢脳神経外科病院
院長
松村 茂樹 先生

1983年札幌医科大学卒業、2012年から札幌宮の沢脳神経外科病院院長。日本脳神経外科学会脳神経外科専門医